

しんにほんごの きそ1 新日语基础教程

教师用书



財団法人海外技術者研修協会 編著



外语教学与研究出版社

418017

しんにほんごのきそ 1
新日语基础教程 1

教师用书

财団法人 海外技术者研修协会 编著



外语教学与研究出版社

(京)新登字 155 号

京权图字 01-98-1640

图书在版编目(CIP)数据

新日语基础教程(1)教师用书/(日)财团法人海外技术者研修协会编著. - 北京:外语教学与研究出版社, 1998.8

ISBN 7-5600-1486-0

I. 新… II. 财… III. 日语-教学参考资料 IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(98)第 20984 号

新日本語の基礎 1 (教師用指導書)

3A Corporation

Shoei Bldg., 6-3, Sarugaku-cho 2-chome, Chiyoda-ku, Tokyo 101, Japan

© 1992 by the Association for Overseas Technical Scholarship (AOTS)

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced, stored in a retrieval system, or transmitted in any form or by any means, electronic, mechanical, photocopying, recording, or otherwise, without the prior permission of the copyright owner.

First published in Japan by 3A Corporation 1992

只限在中华人民共和国境内销售 不供出口

本书封面贴有 AOTS 的防伪标签,无标签者为盗版,不得销售

新日语基础教程 1

教师用书

财团法人 海外技术者研修协会 编著

* * *

外语教学与研究出版社出版发行

(北京西三环北路 19 号)

北京大学印刷厂印刷

新华书店总店北京发行所经销

开本 787×1092 1/16 11.25 印张

1998 年 9 月第 1 版 1998 年 9 月第 1 次印刷

印数: 1—5000 册

* * *

ISBN 7-5600-1486-0

G·629

定价: 12.90 元

は じ め に

1. 本書は「新日本語の基礎Ⅰ」（以下「新基礎Ⅰ」）の教師用指導書であり、財団法人海外技術者研修協会（以下協会）で日本語教育を担当する新人教師の訓練に用いることを目的としている。
2. 本書は二部に分かれる。第一部は「新基礎Ⅰ」の使い方総論である。第二部は各課の実践的な導入方法と諸注意事項である。
3. 第一部の内容は「新基礎Ⅰ」の巻頭にある「序」、「改訂にあたって」及び「凡例」に沿って詳述したものである。併読されることが望ましい。
4. 第二部の内容は、初めて日本語教育に携わる教師の便宜を考えて作成された。もともと現場の教師が現場的な発想に基づいて作成したもので理論的な厳密さに欠ける箇所もあるが、新人教師にとっては益するところが多いと思われるので、このような形にまとめたものである。
5. 第二部は「新基礎Ⅰ」の構成に従い、各課ごとに「提出順序」、「文型の導入方法」、「文法及び語彙の説明」、「ドリル」、「会話を行う際の注意事項」、「一般的注意」があげてある。第二部に採用された提出順序や導入方法がすべての場合に当てはまるわけではない。しかし、提出順序や導入の工夫を重ねることによって、学習者は単なる言葉の表面的理解にとどまらず、実際の場面の中の言葉としてとらえ、興味を持って学習することができるであろう。要は教師自身が安易に翻訳に頼らないで、その課の文型に相応しい文例や状況を作成し、使用することである。このことは、導入段階だけに限ったことではなく、授業の全課程を通じて教師が忘れてはならない基本的な心構えといえよう。
6. 第一部と第二部は昭和48年3月に内部資料として、別々の冊子の形で作成された。その後修正を加え、昭和52年7月に合本版「日本語の基礎Ⅰ 教師用指導書」として出版された。その後再版するにあたり一部改訂が施され、現在まで使用されてきた。今回「新基礎Ⅰ」が出版されたことに伴い、「新日本語の基礎Ⅰ 教師用指導書」として生まれ変わったのである。教科書「新基礎Ⅰ」を用いる際の参考にいただければ幸いである。

目 次

第一部 新日本語の基礎 I — 教科書の使い方 —

I 教科書の編集方針	3
1. 対象と目標	3
2. 指導方法と学習内容の選択	4
3. 文型と会話表現と練習	5
II 教科書の構成	6
1. 本冊、分冊1 (各国語版)、分冊2 (文法解説書)、別冊付録 (問題の答え)	6
2. ローマ字版・漢字かなまじり版・分冊各国語版・分冊文法解説書	6
3. 文型と文法項目	7
4. 活用形とその名称	8
5. 語 彙	9
6. 進度と期間	10
III 教科書の説明及び使い方	11
1. 文型・例文・会話	11
2. 練習 A	13
3. 練習 B	14
4. 練習 C	18
5. 問題と復習	27
6. 絵チャート	28
7. 分冊1 (各国語版)	28
8. 分冊2 (文法解説書)	29
9. 表記上の注意	30
10. よく使われる固有名詞及び文中の記号等	31
11. カセットテープ	32
12. ビデオ教材	33

第二部 新日本語の基礎 I — 導入方法と注意事項 —

日本語の発音	37
第 1 課	39
第 2 課	42
第 3 課	46
第 4 課	50
第 5 課	54
第 6 課	57
第 7 課	63
第 8 課	69
第 9 課	75
第 10 課	80
第 11 課	86
第 12 課	90
第 13 課	96
第 14 課	102
第 15 課	108
第 16 課	113
第 17 課	119
第 18 課	124
第 19 課	130
第 20 課	137
第 21 課	143
第 22 課	148
第 23 課	153
第 24 課	161
第 25 課	168

第一部

新日本語の基礎 I

—教科書の使い方—

I 教科書の編集方針

1. 対象と目標

- 1) この教科書は、協会が対象とする技術研修生の100時間コース用として編纂されたものであるが、教科書の説明を読み、その指示に従うならば、一般の短期学習者、あるいは入門期の日本語教育にも十分活用できるものと確信している（「新基礎Ⅰ」より）。

この教科書は日本へ来た研修生が、日本の社会で生活しながら、工業技術の効果的習得のための、コミュニケーションの手段として、日本語を学ぶという需要に応じて作成されたものである。そのため、取り上げられた語彙や文例の中に、「研修生」、「工場見学」、「大阪で実習します」などがあるが、特別な文型や専門用語を含んでいるわけではなく、あくまでも一般的コミュニケーションに必要な基本的な日本語が前提となっている。

- 2) この教科書は、初めて日本語を学ぶ人々に対して、日本語の基本文法、語彙の学習及び会話練習を通して、最終的には日常生活に必要な会話力を習得させることを目標としている。

協会の研修生は、漢字圏（中国、韓国、香港など）と非漢字圏に大別され、更に、学習経験のある者となない者に区別される。この教科書の内容は、「初めて日本語を学ぶ非漢字圏の人」を一応の基準として定められた。これ以外の場合には、課を早めに進めたり、教科書にない語彙を加えたりする工夫が必要となろう。また、この教科書は、ある特定の言語と関連づけて構成したわけではないので、どの言語圏からの学習者に用いても差し支えない。語学の習得には全体の骨組みとしての文法と、その肉付けとなる語彙の学習が不可欠の条件であるが、研修生の場合、最終的に要求される技能は会話力である。しかし、その会話力を養うためには、基本的な文法と語彙の知識を着実に積み上げ、かつまた、会話練習をしていかなければならない。

- 3) 平仮名、片仮名及び漢字の指導、又は、日本文の読み書き指導等は原則として含まない。

初めて日本語を学ぶ非漢字圏の研修生には、本冊ローマ字版を使って授業を進め、日本文の読み書き指導（流暢かつ正確に読んだり書いたりする指導）は行わない。

しかし、もともと漢字を知っている中国や韓国からの研修生は、平仮名、片仮名が

分かれれば日本文の語彙の幅が急速に広がるから、たとえ初めは知らなくても教えたほうがよい。また、非漢字圏であっても、平仮名、片仮名を学んできた者には、本冊漢字かなまじり版を使ってもよい。非漢字圏言語の分冊（英語、インドネシア語、タイ語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語）の語彙の部において、ローマ字に仮名が併記してあるのはそうした研修生の便宜を考えてのことである。いずれにしても、「聞く・話す」教育の補助手段としてのローマ字、あるいは、仮名表記であるから、「読み・書き」指導はこの教科書の最終目標ではない。

2. 指導方法と学習内容の選択

この教科書は、本来、日本人の教師のもとで短期間に集中的に学習し、最大の効果を上げるように編集されたもので、理論よりも実用性を重んじた。したがって、使われた文型及び語彙は、まず基本的であること、使用頻度が高いことのほかに、初学者にとって理解しやすいこと、発話しやすいことを重視して選択した。

この「新基礎Ⅰ」本冊は、文法説明や、各国語訳を分冊として別にもつ、日本語文のみの教科書であるから、教師の指導のもとに利用されることが望ましい。集中学習とは、教師が短期間のあいだに連続的にパターン・プラクティスなどのドリルを駆使し、かつまた、実際の会話練習を通して、学習者に密度の高い言語活動を行わせることを意味する。そのため教師は単に文法の説明ができるだけでなく、各種のドリルや会話練習の進め方にも熟知していなければ、短期間に最大の効果を収めるという集中教育の実を上げることは難しい。

実用性を重んじるという例をあげると、例えば助詞「は」の扱いである。「は」は主語ないしは主格を表すのではなく、主題又は題目を表す助詞であると言われている。しかし、この教科書では「私はリーです」のように主題とはいっても主語的用法が主なもので、その他の場合、例えば『取り立て』（新基礎Ⅰ本冊218ページ、1. B:2参照）などはごく軽く扱っている。

これに対して、まさに主格を表す助詞といえる「が」の文例は、最初に「～が好きです」のように対象を示す場合から先に提出し、その後徐々に主格としての用例を出すようにした。そのため学習者は、主格を表す助詞は「は」だけである、という印象を初めにもつ。これは文法教育としては片手落ちであるが、実用性を重んじ、初学者にとって理解しやすいことをねらう導入期における一つのテクニックとしては許されると思う。

3. 文型と会話表現と練習

この教科書は、文型中心に構成されている。文型とは、日常交わされている日本語の会話の様々な表現を、幾つかの主要な完結した文の型に整理したものである。これらの文型を十分な口頭練習を通じて定着させ、同時に実用的な会話の練習を加味して、学習者の会話力を養成するというのが、この教科書の基本的な考え方である。

人間の言語活動は、発表（production）又は運用と、受容（reception）又は理解との二つに大別される。両者はあたかも呼気と吸気のようなもので、言語教育においてもいずれか一方の技能があれば用が足りるというわけではない。しかしながら外国語の教育と学習という立場から考えると、「運用できなければならない言語内容」と「理解できなければならない言語内容」とが全く同一である必要はない。

例えば、“must go”の意味を表現する日本語としては、

- | | |
|------------|-----------|
| (A) 行かなければ | (B) なりません |
| 行かなくては | いけません |
| 行かないと | ならない |
| 行かなきゃ | いけない |
| 行かなくちゃ | |

のAとBとの組み合わせによって、幾通りかの表現が可能であり、そのどれを聞いても意味が理解できるのが望ましい。しかし、運用の立場からすれば、そのうちのいずれか一つを話すことができればその意図は満たされる（この教科書では、「行かなければなりません」という組み合わせを採用している）。

この教科書では、そうした多くの同一内容の表現から、発表または運用に最も適した標準的な文型を選び出し配列した。この文型を「発話文型」と名付けるが、例からも分かるように、この発話文型は、学習者がそれを用いて自分の考えを発表していく場合、日本人にできるだけ素直に誤解なく伝わる文型ということである。そしてそれはまた、学習者が理解し、覚えていくのに最も容易な文型でもある。なお、上記の例で「行かなくては いけません」以下の表現を協会内部では「理解文型」と呼ぶことがある。これは学習者が、聞いて理解できればよしとして、発表までは要求しない文型である。

前述したようにこの教科書の表現はすべて発話文型である。「聞いて分かればよい」ということで不用意に理解文型を提出すると、必ず不慣れな教師や文法的に解明されなければ納得しない学習者を悩ますことになる。この点を考慮して「新基礎Ⅰ」では理解文型を提出していない。しかしながら教室の一步外は、初級学習者にとっては理解文型だらけということにもなろう。この現実を教師も学習者も避けて通ることはできない。

結論的にいうと、教師は教科書の文型に従って十分口頭発話練習を行うと同時に、学習者を混乱させない程度に、生に近い日本語も折りにふれて聞かせる必要があるということになる。

II 教科書の構成

1. 本冊、分冊1（各国語版）、分冊2（文法解説書）、別冊付録（問題の答え）

翻訳を本冊より分離して分冊としたことが、この教科書の特徴の一つであるが、それには二つの理由がある。まず第一の理由としては、この教科書がクラスで日本人の教師のもとに利用されるものであるから、翻訳があってはかえって創造的な授業の妨げになると考えられたためである。

第二の理由は、学習者の現状と言語背景の多様さにある。現状をみると、理解力、年齢、言語学習の経験にかなり幅があり、自習の便宜の上からも翻訳を完全に除外することはできない。そして、学習者の言語背景の多様さは、ある特定の言語の翻訳（例えば英語訳）だけで済ますことを許さない。

以上のような二つの理由から、翻訳を一切含まない、どの言語の学習者にも用いられる共通部分を本冊として作成し、その周囲に各国語翻訳版の輪を広げていくことになったのである。

2. ローマ字版・漢字かなまじり版・分冊各国語版・分冊文法解説書

既に述べたように、この教科書は初級学習者の会話力の育成を目的とするもので、読み書き指導は考慮の外にあるから、ローマ字表記であれ、漢字仮名まじり文であれ、学習者にとってどちらが使いやすく、また、効果的かという観点に立って選択すればよい。漢字かなまじり版は漢字についていえば、原則として常用漢字表に従ったので、これを用いて読み書き指導を兼ねることができる。

分冊各国語版の非漢字圏版（英語、タイ語、インドネシア語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語）の中の語彙は、ローマ字に仮名を併記し、漢字圏版（韓国語、中国語）については、仮名と漢字で表した。分冊文法解説書は、英語版、タイ語版、インドネシア語版、スペイン語版、韓国語版、中国語版が出版されている。

3. 文型と文法項目

この教科書は文型を軸として内容が展開しているので、各課で教える文法項目すなわち各課の文型と考えて、ほぼ間違いない。そして各課の「文型」・「例文」・「会話」は、それぞれの利用目的に従って、文法項目（文型）が具体的に文例化されたものである。

ところでこの教科書では、文型を「文として完結しているもの」と規定した。そのため文法項目の中に、それ自身では文型を構成しないものが出てくる。例えば、第2課、第3課の「これ、それ、あれ、ここ、そこ、あそこ、どこ」は、極めて重要な文法項目であるが、必ずしも「～は～です」という文型の成立に必要なわけではない。また、第14課の「ワープロの使い方」という表現は、「ワープロを使います」から一定の変換によって作り出されるのであるが、それ自体は名詞的表現であって単独には文型を構成しない。この教科書では、以上のように文型を構成しない文法項目はなるべく単語として処理するようにした。

文型を、文として完結しているものに限定すると、その成立に最も本質的に関与するのは、述部と助詞である。その点に着目してこの教科書の基本文型を整理すると、次のようになる。

- | | | |
|--|------------|--------------------|
| ① (Nの) N $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{は} \\ \text{も} \end{smallmatrix} \right\}$ (Nの) Nです | (1, 2, 3課) | N = 名詞、代名詞 |
| ② [T (に)] (Nへ) (Nで) (Nと) V-ます | (4, 5課) | V = 動詞
T = 時の表現 |
| ③ (Pで) (Nに) NをV-ます | (6, 7課) | P = 場所の表現 |
| ④ N $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{は} \\ \text{が} \end{smallmatrix} \right\}$ (Nより) Adj.(N) です | (8, 12課) | Adj. = 形容詞 |
| ⑤ NはNが (Adv.) $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{V-ます} \\ \text{Adj.-です} \end{smallmatrix} \right\}$ | (9課) | Adv. = 副詞 |
| ⑥ PにNが (Num.) $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{あります} \\ \text{います} \end{smallmatrix} \right\}$ | (10, 11課) | Num. = 数量の表現 |
| ⑦ V-活用形+後続句 | (13~19課) | |
| ⑧ 普通体 | (20課) | |
| ⑨ 普通形+後続句 | (21, 23課) | |
| ⑩ 連体修飾節 | (18, 22課) | |
| ⑪ 授受表現 | (24課) | |
| ⑫ 仮定形 | (25課) | |

以上の分類はあくまでも便宜的なものである。殊に、①~⑥、⑦、及び⑧~⑫の三者の間にはそれぞれの特徴があり、文型といっても同一の概念で処理することはできない。

い。しかしながら、いずれも文（複文中の従属文なども含めて）の完結に関与する述部の、前述の特徴が基準となってまとめられているという点で共通している。なお、後続句というのは、協会内において使っている表現で、一般に認められている名称ではない。

4. 活用形とその名称

活用形をどう認定し、どのような名称で呼ぶかには、いくつかの考え方がある。外国人のための日本語教育では、いわゆる「学校文法」の活用形及び名称と離れたものを使う場合が多い。このテキストで扱われる活用形とその名称を以下に一覧表で示し、若干の説明を加えることにする。

ない形	ます形	辞書形	て 形	た 形
書か kaka	書き kaki	書く kaku	書いて kaite	書いた kaita
食べ tabe	食べ tabe	食べる taberu	食べて tabete	食べた tabeta
見 mi	見 mi	見る miru	見て mite	見た mita
～し ～shi	～し ～shi	～する ～suru	～して ～shite	～した ～shita
来 ko	来 ki	来る kuru	来て kite	来た kita

- (1) この教科書の活用形は、あとに接する後続句との関係で決まる。後続句は例えば、「～ないでください、～たいです、～ことができます、～ください、～ことがあります」などがあげられるが、それらは決まった形をとる。その形をそのまま活用形とし、その活用形の特徴をとらえて呼称が決められる。

〔ない形〕：〔書か〕 ＋ ないでください

〔ます形〕：〔書き〕 ＋ たいです

〔辞書形〕：〔書く〕 ＋ ことができます

〔て 形〕：〔書いて〕 ＋ ください

〔た 形〕：〔書いた〕 ＋ ことがあります

- (2) 「書か」を「ない形」と呼ぶことについては、「書かれる」、「書かせる」(「新日本語の基礎Ⅱ」以下「新基礎Ⅱ」1993年4月刊行予定)などの場合があるので不都合ではあるが、それらに共通する名称を考えることは不可能に近い。一方後続句との接続には、「書か+〜」、「書き+〜」、「書く+〜」のように「五十音図」に従って接続すると考えたほうが初学者には分かりやすい。つまり、「書かない」までを一つの形(ない形)とするより、「書か」を一つの形ととらえたほうが簡明である。以上のことから、「書か」の形を「ない形」という言葉で代表させることにした。
- (3) 「～たら」、「～ても」については、特に呼称を定めてはいないが、実際の授業では、「た形+ら」、「て形+も」として教える。
- (4) 「い形容詞」、「な形容詞」、「名詞+です」に関して、「暑くて」、「きれいで」、「雨で」をそれぞれの「て形」と呼ぶことがある。

5. 語彙

「新基礎Ⅰ」の語彙の総数831は、分冊PartⅠの各課別の単語と慣用表現、及び本冊「教室のことば」中の18語(分冊各課語彙リスト中にない語)をそのまま合計した数字である。索引の単語総数とも一致する。単語としての認定の仕方はあくまでも便宜的なものである。このテキストでは、0(ゼロ、零)など読み方の違うものは2語として数えてある。また、この教科書における、文型認定の一つの目安とした述部表現「～です、～たいです、～なければなりません」などと助詞「は、に、で、を」などは加えられていない。これらは文型提示の段階で十分に説明されるであろうし、また、単独では翻訳しにくいものが多く、単語表に載せなかったからである。ただ助詞の中でも「から」、「まで」、「と(対等接続)」、「が(接続)」などは、外国語の置き換えが比較的容易であることで単語表にも掲げられているため、総数831の中に入っている。

この教科書で使われている単語はすべて日常生活に関係した生活語彙である。学習者である技術研修生から、その特殊性に応じて、工場内語彙ないしは技術用語を優先して教えるべきだ、という意見をよく聞くが、生活語彙はいかなる環境や会話の場面においても基本となるべきもので、それらを差し置いて特殊な語彙を与えることは無理が多い。また、831という数は、C. K. Ogdenのいう「話すに必要な最小限度の語彙850」にはやや少ないが、初級の第一段階としてはまず妥当な数であろう。

さて、これらの単語の各課への配分についてであるが、前項に述べた文型中心の授業が、型通りの意味のない繰り返しに終わらないためには、文型と単語の適切な融合が問題となる。つまり単語は、最も相応しい文型と共に用いられ、まず、自然な例文として

登場すべきである。ある単語群が、同一の文法的カテゴリーでまとめられて同時に提出されたり（例えば、助数詞や副詞をまとめてしまう）、意味のつながりだけで芋づる式に提出されたりする（例えば、衣服に関する関連語をまとめる）のは、効果的とはいえない。

しかしながら、「文型を構成しない文法項目」や単語が、それぞれの機能や意味のつながりを全く分断されて、ばらばらに違った文型の中に組み込まれるのがよいかというと、必ずしもそうではない。殊に成人に対する語学教育においては、学習者の記憶を助けるために、単語相互の意味や機能のつながりを無視はできないし、短期の集中教育という性格からもある程度やむを得ない。そのため、合計831の単語は、文法上の機能の類似性や意味の関連を生かして、課によってはまとめて提出した。例えば、数字に関する表現はなるべく各課に振り分けたが、数量や期間を表現するものについては「～があります（います）」の文型に関連させて第11課にまとめた。また、時に関する表現のうち、「先週、今週、来週」などは、まとめ過ぎてかえって記憶に残りにくいという恐れがあるが、第5課に一括して載せた。こうした単語については、次に適切な文型が提示されるたびに、練習の中で繰り返し用いて、次第に定着させていかなければならない。殊に前半の課においては、1課の新出単語数が50を越えている課もあり、必須とはいえ、そのすべてがその日のうちに記憶されると期待するのは、学習者にとって酷であり、また、望み過ぎであろう。

6. 進捗と期間

1課に3時間かかるというのは、限られた語彙を使ってその課の教育内容を理解させ、新出語を含めた口頭練習を経て、最終的にはその課の文型を用いた質問に答えられるようになるまでをいう。しかし、前項に述べたように、1課の新出語が多過ぎる場合もあり、3時間のあとには、それに匹敵する復習の時間が必要である。理想的には午前中3時間の授業の後、理解活動の強化や、応用的な質問と答えのやり取りを含む授業が午後に設けられるのがよい。殊に、1日に2課進むことは、たとえ授業時間を2倍にしたとしても避けなければならない。同様に5週間というのも最低の期間であって、合計100時間を満たしていても、4週間以下に短縮することはできない。

Ⅲ 教科書の説明及び使い方

1. 文型・例文・会話

この教科書は大きく本文内容と練習の部分に二分される。本文内容は「文型・例文・会話」の三つに分割されており、その課で教えることになっている学習事項はすべて網羅されている。教科書の内容と使い方については凡例に記されているので参照されたい。ここではこのように本文内容を三つに分割した意図について述べたい。

授業の進め方と、それに沿った教科書のタイプは二つある。一つは、まず基本的な文法の規則や語彙を提示して、それらを確実に理解させようとして枝葉を付けた文章に発展させ、教師と生徒間の問答、更に状況を設定した会話のやり取りへと進む、いわゆる分析的な方法と、もう一つは、初めから文型や語彙を、なるべく実際の状況を伴った文章の中で提示して、そこから新出事項を取り出しながら教えていくという、いわゆる総合的な方法である。

協会の日本語教育は、短期間にできるだけ効果的に日本語のアウトラインを習得させ、日常生活に必要な会話力をつけさせるという目的からいっても、前者の分析的な方法をとってきた。しかしながら、後者の考え方が全くなかったわけではない。例えば、「日本語の基礎Ⅰ」（以下「基礎Ⅰ」）の前身「実用日本語会話」には各課ごとに比較的長文の「会話」があり、一定のテーマに従って内容が構成され、その課の文型や語彙をほぼ網羅している。実は、当初の編集者の意図では、これらの「会話」は課の先頭にもってきて、会話内容に沿って授業を進めながら、更に文型練習を展開するはずであった。しかしながら、編集会議の過程でその方法は協会の実情に合わないということで修正され、結局、「会話」の中から「基本文型」を抽出し、それを初めに基本文型として並べ、「会話」は応用教材として「ドリル」の後に置くという折衷案に落ち着いた。そしてこれらの会話は1日1課の進度で3時間の枠内で触れるには量が多過ぎ、内容的にもやや難しかったので、学習者の力量に応じ量を案配して用いるというものであった。

以上の経験を踏まえて、「基礎Ⅰ」は授業の実際に合わせて、基本から応用へという「実用日本語会話」の方法をさらに徹底し、「基本文型」も、より機能を明確にするため「文型」と「例文」に分けた。「会話」については、応用でなく必須にするために、必要な慣用表現を盛り込み、ある程度その課の文型を軸とするがそれには余りとられないで、むしろ、暗記可能な長さにした。今回の「新基礎Ⅰ」においては、「基礎Ⅰ」の方法をほぼ踏襲しているが、以下の点で若干異なっている。